



那須与一伝承館通信〈第18回〉

○歌川豊国画 「十二月之内 文月廿六夜待」

今回は那須与一伝承館が収蔵する資料の中から、三代歌川豊国画「十二月之内 文月廿六夜待」を紹介いたします。

この作品は、安政元年（一八五四）に江戸末期の浮世絵師、三代歌川豊国（国貞・一七八六―一八六五）が描いた浮世絵です。

本品は豎大判三枚続（三枚貼り合わせ）の浮世絵で、寸法は縦37・8センチメートル、横78・3センチメートルで、七月二十六日の夜に月待をしながら、座敷で寛ぎ、酒肴を楽しむ三人の女性が描かれています。画面中央の女性をみると、隣の女性に豆腐を勧めています。夏の夜の粋で涼しげな一こまが、鮮やかに描かれています。

この二十六夜待ちとは、江戸時代、陰暦正月・七月の二十六夜に月の出を待つて拝むことです。月光の中に弥陀・観音・勢至の三尊が現れるといわれており、江戸高輪から品川の辺りで盛んに行われ

ていました。

二十六夜では、月が昇るのは午前0時から2時ごろになります。当時の人々は、真夜中に月が出るのを待ちながら、飲食を楽しみ、歓談をしながら涼んでいたのでしょう。

また江戸の人々は、夜間、自由に外出できませんでしたが、二十六夜待ちの夜は、特別に外出が許されていました。したがって二十六夜待は、「江戸っ子にとつて夜間の外出が許された楽しみの一つでした。」

現在、この資料は那須与一伝承館において展示されています。ぜひご覧ください。

■問い合わせ

那須与一伝承館

TEL (20) 0220



歌川豊国画「十二月之内 文月廿六夜待」
(那須家所蔵/当館寄託)

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 37

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は、親園地区公民館の駐車場から見て南側の植込み近くにあります。

繭玉のようなシルエットで、半分から下の部分は綺麗に磨きあげられ、上半分はワニ革のように彫り込まれ、中はくり抜かれて空洞になっています。

この作品は「舟」を模しているのだそうです。その舟は、湿原に点在する景色を移しこむ程に穏やかな水溜りのように虚実を一体化してしま



湿地・風の痕跡

かんの 菅野 やすし 泰史 日本 2003年

「曖昧なりアリティ一の境界面」と、あまりにも過剰な情報量から虚実の判断が曖昧になった「浮遊する意識の乗り物」を視覚化したものであり、それによって

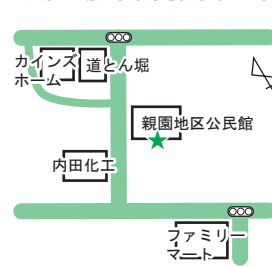


菅野 泰史 氏

「曖昧さそのものを実体化する」事を試みたようです。水面を撫でる風が水と景色の境界を明かす様に、この作品が「浮遊しやすい意識を現実に繋ぎ止める数少ない手がかりになり、存在することの豊さとその可能性を再認識するきっかけになれば」と作者は願っています。

作者は宮城出身の菅野泰史氏。愛知県立芸術大学大学院を修了後、国内の各地で活躍をされています。

設置場所案内図(★印)



■問い合わせ

文化振興課文化振興係 TEL (23) 8718